

明治期の利根川中流域における蚕種農家集落および桑園の分布状況とその特徴について

Location Characteristics of the Silkworm Egg-producing Farms Hamlets and Mulberry Plantations along the middle reaches of Tone River

栗原 正博* 篠沢 健太**

Masahiro KURIHARA Kenta SHINOZAWA

Abstract: This study surveyed the location characteristics of silkworm egg-producing farms hamlets and mulberry plantations along the middle reaches of Tone River, in Isesaki City of Gunma Prefecture and Fukaya and Honjo City of Saitama Prefecture. The region encompasses the constituent elements for the certification as World Heritage and understanding its surrounding landscape enhances its value. The study was conducted by interpreting old maps surveyed by the Land Survey Department of the Imperial Army (jinsoku-sokuzu) on mid-Meiji Period, surveying documents and studying in the field. The results show that factors behind the formation of silkworm egg-producing farms along rivers include good drainage conditions and suitability for mulberry cultivation to feed silkworms. Moreover, the development of water transportation of Tone River had a strong influence on the location. During the Meiji Period, mulberry plantations spread along and across Tone River, contributing to the high-volume production of silkworm egg-producing industry. The land formerly covered by mulberry plantations is now occupied by industrial parks and dry fields, where the region's famous green onions are grown.

Keywords: Tone river, silkworm egg-producing farms hamlets, mulberry plantations, TAJIMA Yahei, land-use

キーワード: 利根川, 蚕種農家集落, 桑園, 田島弥平, 土地利用

1. はじめに

2014年に世界遺産に認定された「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、構成資産である富岡製糸場（富岡市）、田島弥平旧宅（伊勢崎市、写真-1）、荒船風穴（下仁田町）、高山社跡（藤岡市）の4つによって構成される。これらの資産では、高度な製糸技術、良質な蚕の品種開発や蚕の飼育法の普及、蚕種貯蔵などが繋がり、高品質な生糸を安定かつ大量に生産することに成功し、絹を世界へ広める結果となった¹⁾。幕末・明治初期における群馬県の養蚕業は群馬県全体に広がり、主に河川沿いを中心に繭、糸、織物、蚕種の各種、絹産業が成り立っていたことが読み取れる。

構成資産の1つである田島弥平旧宅が建つ伊勢崎市境島村（旧島村。以下「島村」という）地域は、利根川中流域に位置し、この地域一帯では蚕の卵を紙に産み付けさせ販売する「蚕種製造」を行っていた。明治期に蚕種生産は全盛期を迎え、蚕種農家は大

きく発展した。『群馬県蚕糸業史』では「勢多郡沢入、佐波郡島村一帯、多野郡藤岡付近、群馬郡国府近在、利根郡沼田付近等をも本県蚕種製造地域と見るべきであろう²⁾と述べられており、島村一帯を蚕種製造地域と位置付けている。特に、図-1から「蚕種を主とする地域」は利根川沿いに発達していることがわかる。そこで本論では利根川沿いに集中する蚕種農家集落と桑園の関係について調査することにした。

島村をはじめとする利根川両岸の集落は蚕種製造を盛んに行い、それに伴う桑園を形成するとともに、特徴的な集落景観を生み出すこととなった³⁾。黒津らは蚕種農家特有の建築構造である換気口の役割を果たす越屋根、石垣や屋敷林などを景観構成要素として挙げている³⁾が、蚕種農家集落と桑園の関係については十分調査されていない。また、田島弥平は「養蚕新論」「続養蚕新論」で桑栽培の重要性を述べ、蚕種農家の発展に大きな功績を残したが、養蚕の衰退した今日、島村地域をはじめ周辺地域で桑園らしきものは見当たらず、景観的要素としての研究はされていない。加えて、桑園のその後の土地利用についても調査は十分でないと筆者らは考える。同様の研究として養蚕の盛んだった埼玉県美里町では観光農園としての利用を深瀬⁴⁾が挙げており、利根川中流域ではどのような利用をされているのかを検証することとした。

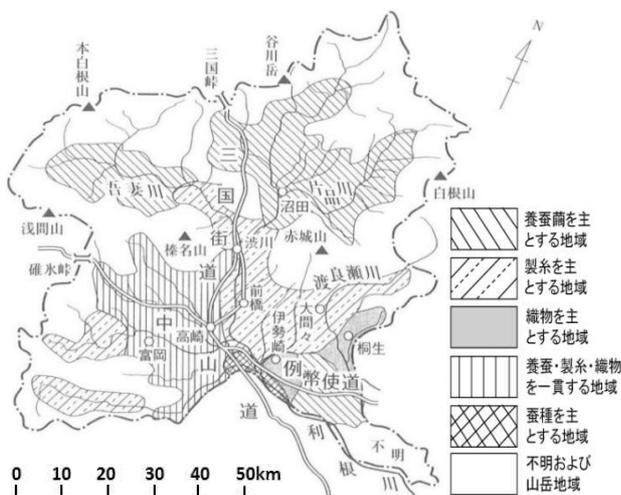


図-1 「幕末、明治初期に於ける群馬県蚕糸業地の地域構造」⁵⁾



写真-1 「富岡製糸場と絹産業遺産群」構成資産 田島弥平旧宅

*埼玉県立秩父農工科学高等学校森林科学科 **工学院大学建築学部

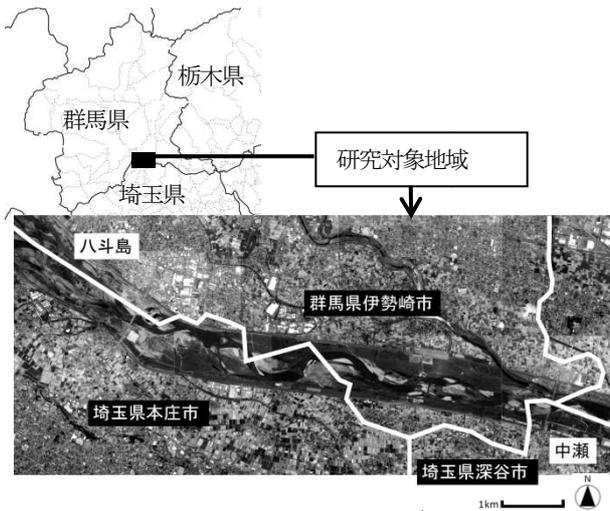


図-2 研究対象地域の位置⁶⁾

本研究では明治期における利根川中流域を中心とした蚕種農家集落を対象に、本地域特有の桑園・集落の分布状況について地理的、歴史的に検討しつつ、その後の土地利用について考察することを目的とした。

2. 研究対象地域および調査方法

群馬県と埼玉県の県境を流れる利根川の沿川に位置する群馬県伊勢崎市八斗島町から埼玉県深谷市中瀬の範囲で調査を行った。(図-2) 本論文では、蚕種農家として先駆的な技術を持っていた島村地域の農家集落を中心に島村地域の上下流で河岸が存在した地域も調査対象に加えた。その範囲は、烏川が利根川に合流する群馬県伊勢崎市八斗島町から広瀬川が合流する伊勢崎市境平塚(旧境町平塚)区間及びその下流の河岸を持つ埼玉県深谷市中瀬までとした。八斗島以西や中瀬以東にも蚕種農家は存在するが、烏川沿岸と利根川沿岸では条件が異なり、蚕種農家と水運業の関連を検討するために、まず平塚、中瀬までを検討の対象とした。

島村地域は旧境町に位置したため、(旧境町は伊勢崎市と平成17年に合併) 文献調査は伊勢崎市、旧境町のものを対象に使用した。また、明治期に参謀本部陸軍部測量局により作成された迅速測図を用い、集落や郡境、桑園、桑園及び畑の位置を把握した。桑園は“桑”，桑園と畑が混在しているところは“桑及畑”“畑及

表-1 本地域における利根川の氾濫⁷⁾

1742	寛保2年	利根川大洪水 堤破って氾濫
1757	宝暦7年	利根川大氾濫 麦作全滅する
1808	文化5年	利根川大氾濫 諸作物大被害
1824	文政7年	利根川洪水 前河原村家屋流出する
1840	天保11年	利根川洪水 村々に大被害あり
1846	弘化3年	雨が降り続き利根川洪水
1858	安政5年	利根川大洪水 諸作物不作
1859	安政6年	利根川洪水 床上浸水1m以上の集落多数
1870	明治3年	利根川洪水 平塚川欠被害あり
1897	明治30年	利根川洪水 八斗島堤防破壊20間余
1910	明治43年	利根川大洪水 島村中部流出

桑”と迅速測図に記載されている。

国土地理院の空中写真と現地調査から、桑園の現在の土地利用についても明らかにした。

迅速測図と空中写真は明治期と現在で同じ地域を利用し、比較対象として活用した。

3. 利根川と蚕種農家の関係性

(1) 利根川の氾濫から蚕種業へ

本地域の11集落は全て自然堤防上に位置するが、利根川の氾濫によって甚大な被害を受けてきた。表-1は本地域の洪水についてまとめたものであるが、農作物が被害を受けただけでなく、土地の「欠け」などの問題が多発した。また、集落が利根川沿いの左岸と右岸に分断された。図-3の実線は郡の境界線を表し、破線は大字の境界線を示している。上仁手は利根川の北側に位置しているが児玉郡に属し、島村の新地(4)、新埜(5)、立作(6)は利根川の南側に位置しているが佐位郡に属している。現在でもその名残として、上仁手は埼玉県本庄市、島村は群馬県伊勢崎市である。明治時代の島村地域は、迅速測図では前河原(1)・北向(3)・新地(4)・新埜(5)・立作(6)の5集落が確認できる。図中に記載はないが中州には前向(2)もある。利根川の右岸、左岸、中州の氾濫状況は深刻で、新田開発のために行われた上流の森林伐採が引き金となり、土砂が流れ込み、川底が上昇して洪水の危険度が増した⁸⁾。前河原では安政6年の大洪水で、流水が民家の床上約2m、砂礫は1mほど流れ込み、農作物の収穫は皆無となった⁹⁾。



図-3 明治期の蚕種農家集落と河岸の位置

※歴史的農業環境閲覧システムを利用し、迅速測図から作成 出典：農研機構農業環境変動研究センター

洪水の影響を受ける本地域を迅速測図で見ると、島村集落に田は確認できず、田を持たない村であった¹⁰⁾ことがわかる。島村を中心とする利根川沿いの水田を持たない村は播種農業の分野ではこれといった収入源に乏しく¹¹⁾、税地も田ではなく畑と宅地が対象とされており¹²⁾、稲作に不向きだったと考えられる。享和2年、前河原（明治15年島村と合併）の村明細帳では田はなく、本畑だけであった¹³⁾。洪水の影響を受け、稲作に不向きな本地域では、古くから蚕種製造が行われていた。利根川の北側に位置する長沼村や上蓮沼村で寛政期から蚕種を製造し¹⁴⁾、同時期に島村でも蚕種製造が行われていた¹⁵⁾。洪水の影響を受ける本地域では、蚕種製造へ参入する土壌が元々あったと言える。

蚕種製造を行うためには、広い屋敷・家屋・桑園・得意場（地域の蚕種販売独占権）の権利を買う多くの資金を必要とした¹⁶⁾ため、高収入の水運業を営む村民たちは参入が可能であり、本地域に広く普及したと考えられる。

参考データとして島村では、明治6年に250戸に対し198世帯が蚕種製造を行い¹⁹⁾、明治11年には317戸に対し315艘の船を所有していた⁷⁾とあり、川沿いの旧家では蚕種製造と水運業を兼ねた農家が存在したと考えられる。

（2）水運業の発達と蚕種農家集落の位置関係

表-3の蚕種生産枚数と図-3の集落の位置から、ほとんどの蚕種農家集落が利根川の近くに集落を形成している。この点を水運業の観点から探ってみよう。

利根川には河岸問屋が存在し、江戸への流通に重要な役割を果たしていた。安永5年の河岸問屋の数は平塚河岸7、中瀬河岸2、八斗島河岸2、山王堂河岸2であった¹⁷⁾。特に平塚河岸は江戸時代、年貢米や足尾の銅などを運び、米500俵積級の大型船が出入りしたといわれ¹⁸⁾、主要拠点として機能した。また、明治期は渡し船も多く存在し、たくさんの住民が水運業に従事していた¹⁹⁾。

本地域は洪水だけでなく、噴火の被害にも遭った。天明3年の浅間山の噴火では、泥流が流下し、川底が上昇したため、大型船の運送ができなくなり、小船での運送が必要となった²⁰⁾。莫大な資金の必要な大型船でなく、少額投資で参入できる小型の所働船²¹⁾での積荷の運送が主流となったため、多くの住民が水運業を始めたと考えられる。所働船が増えたため、不正が無いよう寛政5年に幕府がその数を申請させている²⁰⁾。寛政6年の「諸語用向覚之帳」では所働船の鑑札が以下の集落に交付された。長沼村17艘、山王堂河岸16艘、上仁手村10艘、下仁手村19艘、島村21艘、平塚村14艘、中瀬河岸19艘が確認できる²²⁾。

表-2は明治11年の集落戸数と村の持ち船数を調べたものだが、八斗島では56戸に対し21艘、長沼では119戸に対し24艘、前河原（明治15年島村と合併）では32戸に対し4艘、小此木では

表-2 明治11年の利根川沿い集落戸数と村の持ち船数¹²⁾

	持ち船数(艘)	戸数(戸)	一戸の持ち船数
国領	5	30	0.167
前河原	4	32	0.125
上蓮沼	1	44	0.022
八斗島	21	56	0.375
長沼	24	119	0.201
平塚	50	187	0.267
小此木	15	190	0.079
島村	315	317	0.993
上仁手	—	—	—
下仁手	—	—	—
山王堂	—	—	—
中瀬	—	—	—

※児玉郡の集落はデータがないため非表示。一戸の持ち船数は小数点以下第4位を四捨五入。

190戸に対し15艘、平塚では187戸に対し50艘、国領村では30戸に対し5艘、島村では317戸に対し315艘の船を所有していた¹²⁾。島村では、寛政期より15倍増え、一家に一艘の割合で船を所有していた計算になり、多くの家庭で高い収入を得ていたと考えられる。洪水の影響を受ける本地域の集落では稲作、畑作で収入を得ることは難しかったため、水運業と蚕種業での収入で生計を立てていた¹¹⁾。水運業の収入は農業の5~6倍を得ることができた¹⁹⁾。加えて、利根川を利用し蚕種を東京、横浜方面へ運び、商いを行うことができた²³⁾という利点もあり、利根川沿いは輸送に好都合であった。明治17年、高崎線の開通により水運業は急速に衰えたが、島村では明治40年に75艘の船が存在し、水運活動がその後も行われていた²⁴⁾。

表-2の明治11年の持ち船数を見ると、川沿い全ての集落で持ち船があり、水運業に係わりがあったことがわかる。荷物の運搬だけでなく、渡し船などの日常生活に欠かせない使われ方もしていた²⁵⁾。1戸あたりの持ち船数は島村0.993に次いで河岸のある八斗島0.375、平塚0.267であった。河岸のある集落は持ち船が多い傾向にある。明治期に島村には河岸がないが、地理的に平塚河岸に近く、そこで働く者が多かった²⁶⁾。そのような面からみても特に島村は水運業とのかかわりが深いと言える。

それとは対照的に、利根川沿いから北に1kmほど離れた上蓮沼は0.022であった。物理的に利根川から離れている場所では水運業の参入に不向きだったと考えられる。しかし、投資資金さえあれば、蚕種業に参入できたとも考えられる。例えば、上蓮沼地域では、藍染業や金貸業を行っていた五十嵐家が蚕種業に参入している²⁷⁾²⁸⁾。河岸沿いでなくても質の高い桑がとれる利根川周辺地域では参入可能であり、寛政7年には「俳人栗庵似鳩の日記」で長沼村、上蓮沼村で蚕種製造が行われていたとの記述がある。その周辺地域でも蚕種製造が行われていたと推測できる。

以上のことから資金源としての経済力が不可欠で、その他の地域でも有力者が蚕種業を営んでいたが、特に明治期に水運業で得た経済力と蚕種を運ぶ利便性から利根川周辺で蚕種農家が集中したと考えられる。

（3）利根川沿いの蚕種農家集落間の交流による技術発展

利根川沿いの蚕種農家の発展には、田島弥平を中心とした島村地域の蚕種技術の発展が大きい。弥平は火力など使わず自然の気候のまま蚕を飼育する「清涼育」を考案し、養蚕の手引書ともいわれる「養蚕新論」「続養蚕新論」を出版、養蚕技術の向上のために尽力した²⁹⁾。島村の近隣集落出身で親戚の渋沢栄一が、蚕種輸出の推進や蚕種専門会社の島村勸業会社を設立に協力したこともあり、島村地域の蚕種業は大きく発展を遂げた。

島村をはじめとする利根川沿岸の集落では、渡し船で向こう岸まで容易に渡ることができる環境であり、集落間の交流が行われていたことが推測される。その一例として、島村新地の田島家は上蓮沼で蚕種農家を営んでいた五十嵐家と婚姻関係を結んでいる。明治13年に行われた孫祝いの記録「孫祝進物口」（五十嵐正夫氏所蔵）を見ると、島村の数名の名が確認でき、親族間の交流も行われていた。

明治期にはヨーロッパへの蚕種の輸出が全盛期を迎える。高い質を保つため、明治5年に田島弥平らが島村勸業会社を設立した。明治12年に89,000枚もの蚕種を製造する会社であった。また、蚕業長沼会社が設立され、島村勸業会社同様、蚕種専門会社として操業した。そこではイタリアに渡っていた田島彌三郎を招き技術指導をも受けている³⁰⁾。ここから島村地域との技術交流が行われていたことも確認できる。蚕業長沼会社は当時の最先端を行く島村の影響を受け、組織・技術も高いレベルにあったといえる³¹⁾。これらの技術指導の背景には政府が関係している。明治5年2月大蔵省は蚕種家の代表を選定し、群馬県からは島村の田島弥平と

田島武平を「蚕種製造人大惣代」に任命した。

大惣代とその配下の世話役は、未熟な養蚕家に養蚕方法を教諭し、養蚕に新発明を見出した場合は大蔵省に申し立て、組合内へも伝習する。河川沿岸の桑畑開発についても大蔵省に申し立ててたざさわる³²⁾などの役割も担っていた。世話役として、利根川中流域の集落では島村、前河原村（明治15年島村と合併）、小此木村、長沼村、八斗島村などから選出され指導に当たった³³⁾。国の政策を背景に日本を代表する蚕種家の田島弥平、田島武平を中心として、高い技術養蚕技術の向上と安定した生産、品質保持が各集落で徹底された。

利根川兩岸の養蚕農家集落や周辺の集落で親族としての繋がりがあったと推測されること、渋沢栄一のように政府に通じる人材と高い技術力を持つ蚕種家がいたこと、政府のバックアップをもとに島村地域の最先端の技術が反映されたこと等から、島村近隣の利根川沿岸集落で蚕種農家の技術発展がなされたと考えられる。

4. 明治期の桑園の広がりとその特徴

(1) 桑園のはじまり

明治初期まで桑は、畑の周囲に植える「畦桑」や住宅の庭やその周辺などに植えるのが主流であり³⁴⁾、桑園と言われるものは存在しなかったと思われる。畑を桑にしてしまうと穀類が不足するような事態になるため、領主が禁じている地域が多かった。元治元年、伊勢崎藩は五穀の減少を防ぐため田畑に桑の植え付けを禁じた³⁵⁾。沼田藩では文政9年の触書で、「近年百姓たちが上・中・下の畑を区別することなく桑苗を植えて桑園にしてしまっている。これでは穀類が不足し、飢饉の時に困るので、今後はこれらの畑には桑苗を植えてはならない。しかし、山林や荒地であれば植えても構わない」³⁶⁾としている。群馬県蚕糸業沿革調査書では「本懸に於ては桑樹を園圃に栽培するに至りし以來桑畑はあはせなみと稱し一筆の畑地を多数に区劃し其區の境界に桑樹を植付け中間には普通の農作物を栽培し其區劃も至て小區にして一反歩の畑地を十區に分割せりと云う而して苗木は概ね實生を栽培せり次で安政年間に至り海外貿易の益々盛なるに従ひ全畑桑樹を栽培するの園地を見るに至れり」³⁷⁾とあり、1つの畑をいくつも区画し、その境界線に桑を植えた。全畑の桑園は幕末の海外貿易が始まって江戸時代に養蚕と言えれば年一度の春蚕をさし、養蚕は農家の副業として行っただけであった³⁸⁾が、養蚕技術の発達により大量生産が可能になったうえに、海外貿易がはじまり、桑の需要が一段と増え桑園の必要性が増した。明治3年までは本田畑での桑栽培が禁

止されていた³⁹⁾が、明治10年代からは群馬県で桑を畑の一面に植えた桑園が本格的に成立した³⁴⁾。

(2) 利根川沿いにおける桑栽培の利点

利根川の川幅は広く、その周辺集落では風通しと日当たり恵まれていた。『養蚕新論』では、「水辺の砂交じりし地の雨露の乾きよくして太陽を十分に受け、風気来往のよろしきところを桑壇の射雕手⁴⁰⁾とす」とあり、利根川沿いが桑栽培に適していたことを示している。

利根川沿いの集落は利根川の氾濫によって甚大な被害を受けてきたが、桑栽培を行うには恩恵もあった。氾濫で運ばれた島村付近の河川堆積物は砂土が多く、乾燥して水はけが良い。山から運ばれた腐葉土も含まれ、栄養もあった⁴¹⁾。桑園の土は通気性・排水性が良く、養分があるものが好ましい⁴¹⁾とされ、これらの条件を満たす本地域では桑栽培を行う上で好条件だった。加えて、蚕の天敵であるカイコノウジバエの蛹を流し、蚕を守ることができた⁴²⁾。利根川の氾濫は蚕の天敵を自然の力で駆除できる利点があったといえる。田島弥平は桑の重要性を『続養蚕新論』でも述べており、本地域の桑栽培は各地域の見本として知れ渡った。

(3) 蚕種生産量と桑園の広がりの特徴

本地域では水田として不向きな利根川沿いの広大な土地を活用し、桑園を広げていった。蚕種1枚の養蚕に必要な桑畑の大きさは半反歩⁴³⁾とされており、蚕種製造が増えれば増えるほど、それだけ多くの桑園を必要とした。

明治10年『上野国郡村誌』の群馬県での蚕種生産量を確認すると、島村のある佐位郡が抜き出ている（表-3）。ここは長野県上田地域や福島県信達地域と並ぶ蚕種の一産地であった⁴⁴⁾。表-3から伊勢崎市の集落別の蚕種生産量を見ると、小此木2,771枚、八斗島1,650枚、上連沼1,760枚、長沼4,621枚、前河原1,881枚、国領2,992枚、平塚15,000枚、島村65,207枚。生産枚数から桑園の広さを割り出すと、島村は約32,600反、東京ドーム約690個分の桑園が必要になる。図-4を見ても明らかであるが、桑園が大多数を占める。利根川沿いを確認すると、島村以外でもほぼ桑園のみが分布する。利根川から離れると畑と桑園が混在している傾向にある。小さな川や水路のあるところは多少田も見られる。蚕種が1,000枚を超える生産量の多い利根川沿いの集落は小此木、島村、八斗島、前河原、国領、長沼、平塚だが、桑園がほとんどを占めている。

本地域では桑の売買も行っており、桑不足の場合は近隣から購入していた⁴⁵⁾。八斗島では桑苗販売を専門とする農家も見られ⁴⁶⁾

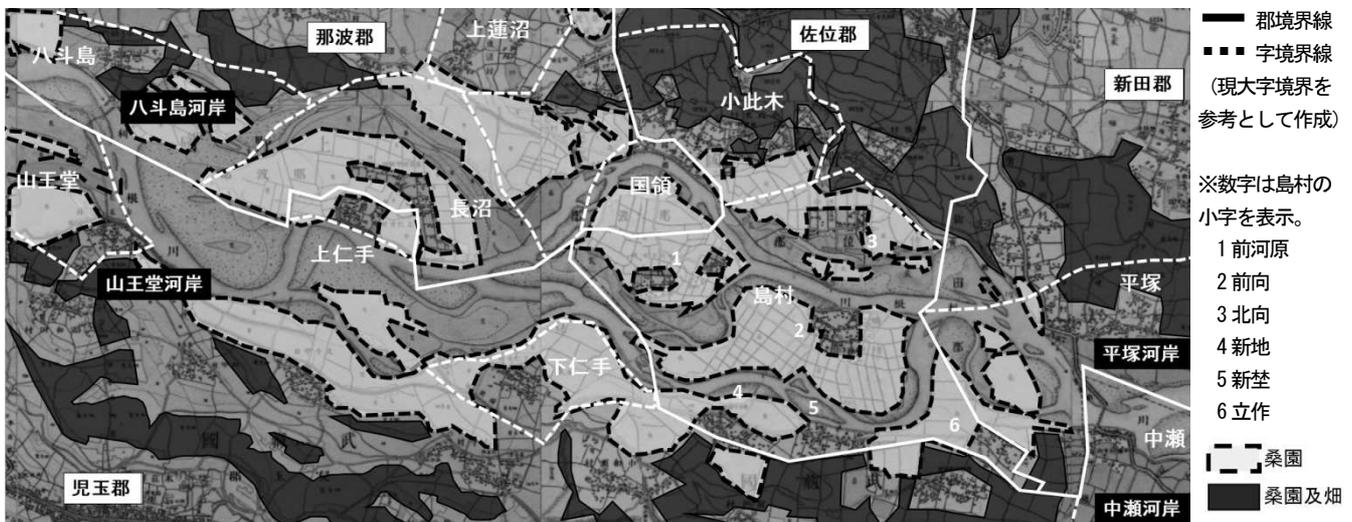


図-4 明治期の桑園の分布

※歴史的農業環境閲覧を利用し、迅速測図から作成 出典：農研機構農業環境変動研究センター

表-3 群馬県下主要蚕種生産 (1,000 枚以上) 47)

地区名	生産量(枚)	地区名	生産量(枚)	地区名	生産量(枚)
群馬郡	24,428	佐位郡	76,458	新田郡	39,757
原嶋新田	3,100	伊与久	7,092	徳川	1,074
半田	2,000	小此木	2,771	大館	2,784
金井	1,823	島村	65,207	二ツ小屋	3,180
岩鼻	1,000	那波郡	27,072	前小屋	10,311
三之倉	13,000	柴町	2,500	前島	2,828
緑野郡	13,317	八斗島	1,650	堀口	3,529
岡之郷	2,073	長沼	4,621	阿久津	1,017
上栗須	2,000	下蓮沼	1,760	平塚	15,000
中栗須	3,200	国領	2,992	多胡郡	31,190
中嶋	2,298	前河原	1,811	吉井	3,390
立石	2,500	角淵	3,680	塩川	2,500
北甘楽郡	4,423	南玉	1,500	池	1,300
富岡	1,372	川井	3,000	馬庭	24,000
下仁田	1,125	沼之上	3,000	碓氷郡	3,534
宮崎	1,000			下豊岡	1,224

※網掛けは伊勢崎市の利根川沿いの集落を示している

桑園の広がりを加速させた。

(4) 利根川沿いにおける桑栽培の特徴 「根刈桑」

明治時代の桑の仕立て方の分類は根刈桑 (写真-2), 刈桑, 立木の3通りある。「立木」とは今日でいう立通し (たてとおし) で, 小枝などを剪定せず放置し芽葉だけを摘み取る方法。「刈桑」は刈取りに便利ように低木仕立にしたもので, その中でも樹幹が地上 50cm までのものを「根刈桑」としている (図-5)

富岡製糸場と荒船風穴のある養蚕の盛んな北甘楽郡を見ると, 根刈桑はほぼ無いに等しい。一方, 伊勢崎市の前身である佐位郡と那波郡では約 92%と大半が根刈桑であることがわかる。(表-4) 「根刈桑なるものは多く水辺砂礫高燥の地に優なるものにして, 我が利根川兩岸の桑園に, 植ゆるに其繁茂するに特に著し」

「水辺高燥の地に植ゆる根刈桑をもって上等の桑園となすべきなり」³⁷⁾と田島弥平が利根川兩岸での刈桑栽培を推奨していることから, 利根川中流域の桑園は根刈桑が占めていたと考えられる。

また, 「洪水淵に溢して満目の桑園に激張するの時, 根より長し葉の桑水の流るゝに随て倒れて, 然も夫れが為圃内の土を削らるゝ少しもなく, 反て幾種の塵芥を留むるなり, 洪水漸く減却するに及て懇切に之をいたまざる様に手にて引起こし置くとときは, 必ず元の如く成立するものなり」⁴⁰⁾とある。利根川の氾濫に

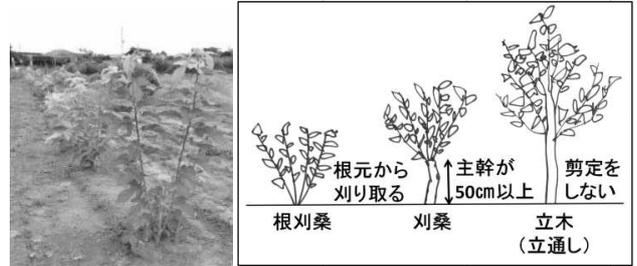


写真-2 根刈桑

図-5 根刈桑, 刈桑, 立木

表-4 桑園面積と根刈桑の割合 (明治 25 年) (単位反, 反以下切り捨て)⁵¹⁾

郡名	根刈桑	刈桑	立木	計	根刈桑の占める割合 (%)
北甘楽	39	30,176	200	30,415	0.1
佐位	5,366	120	545	6,031	92
那波	10,120	150	612	10,882	

※網掛けは現伊勢崎市を示している

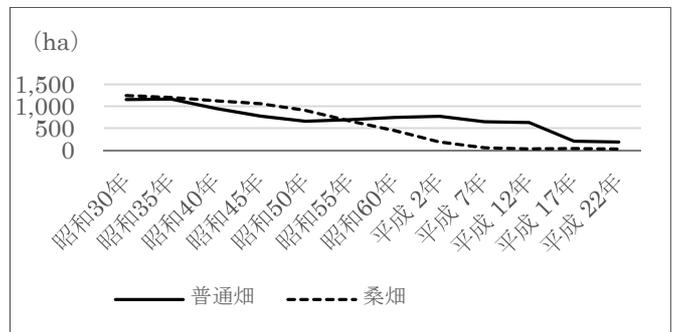


図-6 伊勢崎市における桑園と普通畑の面積の推移⁵²⁾

も耐える枝条の弾力で, 折れる心配が少なく, 倒れた場合でも丁寧に戻せば, 必ず元通りになることを述べている。

幹を高くしない根刈桑は桑の背丈を低く抑えられ, 女性や子供たちも桑摘みの作業が容易にでき⁵⁰⁾人手を確保しやすく, 根刈桑が普及した要因の一つと考えることができる。

(5) 桑園の現在の土地利用に関する考察

図-6 は伊勢崎市における桑園と普通畑の推移についてグラフにまとめたものである。昭和 30~40 年代はまだ桑園がみられる

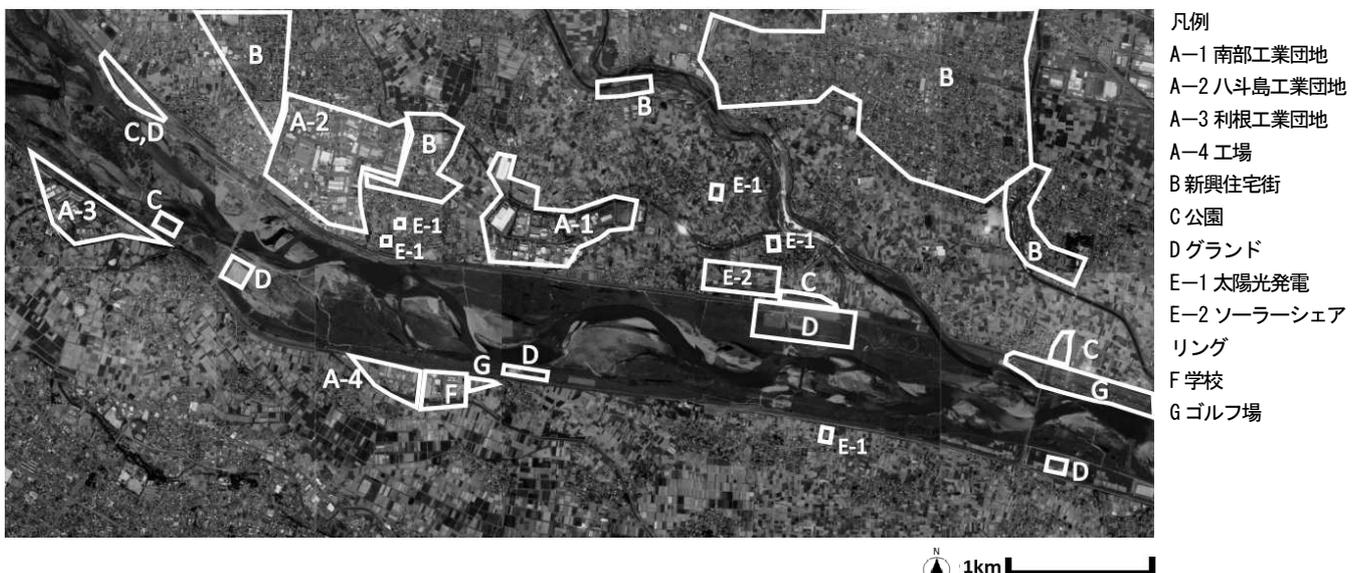


図-7 桑園の現在の土地利用⁵³⁾

が、昭和55年を境に桑園よりも普通畑の方が多くなった。平成7年ごろからはほぼ桑園はなくなった。ここで特筆すべきは工場の多さであろう。図-7を見ると桑園消滅後は工業団地の進出が特徴的であり、伊勢崎市では、南部工業団地(A-1)、八斗島工業団地(A-2)の2か所、本庄市では利根工業団地(A-3)の1か所に作られた。下仁手にも大きな工場(A-4)が確認できる。その他、その隣には私立の中学・高校(F)が並んで存在する。特に伊勢崎市は工場を誘致し、八斗島工業団地は昭和40年、南部工業団地は昭和48年に造成された。桑園は埋め立てをしなくても建物の建設が可能のため、工場進出には好材料であった⁵³⁾。企業の誘致により労働力移入も引き、さらに宅地造成という形で耕地を減少させ⁵⁴⁾新興住宅街(B)を増加させる結果となった。

桑園として使用していた河川敷は、公園(C)、グランド(D)(ラグビー場、野球場など)、ゴルフ場(G)として利用される傾向にあった。また、広大な土地を生かして大規模な太陽光発電(E-2)を行っている土地が見られた。ここでは太陽光パネルの下で野菜を栽培するソーラーシェアリングが行われていた。田は確認できないが、大規模な畑の存在は確認でき、水はけのよい土地を生かして、利根川両岸でネギを栽培している。深谷市の中瀬地区では蚕種農家からネギ農家への転身を図り、「深谷ネギ」のブランドで大成功した。現在、桑園は存在しないが、畑との境界線に植えてある桑(境界桑)が確認できた。桑園の名残と考えらえる。

5. まとめ

利根川中流域に蚕種農家が集中する理由は、水運業の発達により、川沿いに集落が形成されたことに始まる。利根川を利用した水運は幕府、政府の主要な運送手段であり、集落の生活を潤す主要な経済活動であった。高収入を得た者は、膨大な資金が必要な蚕種製造業に参入し、蚕種業と兼業でより財を成した。船は蚕種やモノを運ぶだけでなく、情報も運び、都市からいち早くキャッチできる環境にあり、渡し船などでの近隣集落との交流も見られるなど、情報や技術の習得には好条件がそろっていた。

田島弥平などの蚕種の高度な技術を持つ先駆者が利根川沿いにいたことも大きな意味を持つ。政府にいた渋沢栄一とのつながりが深かったことも幸いした。田島弥平の桑栽培の技術も高く、特に本地域での根刈桑の存在は大きい。利根川の風通しや水はけの良さ、栄養のある土地などの自然的条件も揃い、桑園拡大に拍車をかけた。明治期は蚕種農家のほとんどの土地が桑園であり、蚕種製造がどれだけ盛んだったか理解できる。

桑園の現在の土地利用は、伊勢崎市では工業団地の誘致、深谷市では深谷ネギの栽培奨励地など、市の政策によって大きく異なっている。伊勢崎市は現在でも人口が増加し続け、深谷市はブランド化したネギが主要な農産物として経済基盤を形成しているなど、状況は様々である。本地域では、普通畑として利用されていた耕作地が放棄された風景も目立ち、特に利根川沿いに存在する普通畑は今後の継続利用が容易ではないため、産業・環境・観光面から行政施策を含めた提案が必要であると考えられる。

本研究では世界遺産を支えていた周辺地域についてランドスケープの視点からアプローチを試みたが、今後、新たな付加価値の創造を見据えて、さらに継続的な検討が必要であろう。

補注及び引用文献

- 1) 伊勢崎市教育委員会(2018): 田島弥平旧宅物語-田島弥平旧宅といせさき絹遺産、37-38
- 2) 群馬県蚕糸業協会(1954): 群馬県蚕糸業史 下巻、41-43
- 3) 黒津高行・大野敏・大澤翔多(2012): 境島村の集落景観について-島村・長沼地区の養蚕集落の調査研究-:2011年度日本建築学会関東支部研究報告書II、649-652

- 4) 深瀬浩三(2011): 埼玉県美里町における不耕作農地対策と観光農業の発展: 地理空間 2011年4巻1号、43-55
- 5) 西垣晴次・山本隆志・丑木幸男(1997): 群馬県の歴史、195-198より引用 原因「群馬県蚕糸業史」付録
- 6) 国土地理院撮影の空中写真(2010年撮影)を加工して作成
- 7) しの木弘明(1969): 境風土記、483-518、境町(1995): 境町史 第1巻 自然編、107-115、境町(1995): 境町史 第3巻 歴史編上、305-307より作成
- 8) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、8-23
- 9) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、25-27
- 10) 伊勢崎市教育委員会 文化財保護課(2012): 田島弥平旧宅調査報告書 伊勢崎市文化財資料集5、7-11
- 11) 前掲書10、5-11
- 12) 萩原魚(1986): 上野国郡附誌 14 佐波郡、138-230、萩原魚(1986): 上野国郡附誌 15 新田郡、142-145より作成
- 13) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、27-31
- 14) 前掲書10、18-21
- 15) しの木弘明(1969): 境風土記、483-518
- 16) 伊勢崎市教育委員会(2011): 島村とたてもとの-境島村養蚕農家群調査報告書- 伊勢崎市文化財資料集4、10-11
- 17) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、33-36
- 18) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、36-39
- 19) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、73-78
- 20) 境町(1995): 境町史 第3巻 歴史編上、432-436
- 21) 「ところばたらきぶね」と読み、漁業用や農耕の作業用に利用した小船をいう
- 22) 群馬県(1986): 群馬県史 資料編 14、654-655 利根・鳥川筋所働船書上「諸語用向覚之帳」群馬県玉村町板倉 清水純氏所蔵
- 23) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、110-111
- 24) 金子緯一郎(1979): 利根川と蚕の村-上州島村史話一、79-83
- 25) 五十嵐正夫(2017): 豊受村上蓮沼の明治蚕種屋人物語、62-83
- 26) 境町(1995): 境町史 第3巻 歴史編上、416-417
- 27) 五十嵐基興(2011): 私論 上州伊勢崎 五十嵐一族小史、59-61
- 28) 五十嵐正夫(2017): 豊受村上蓮沼の明治蚕種屋人物語、9-24
- 29) 前掲書1)、104pp
- 30) 五十嵐正夫(2017): 豊受村上蓮沼の明治蚕種屋人物語、58-60
- 31) 伊勢崎市史編さん専門委員会(1985): 伊勢崎市史研究、79-107
- 32) 鈴木芳行(2011): 蚕こみる明治維新 渋沢栄一と養蚕教師、84-86
- 33) 鈴木芳行(2011): 蚕こみる明治維新 渋沢栄一と養蚕教師、83-84
- 34) 宮崎俊弥(2007): 群馬県農業史 上、99-102
- 35) しの木弘明(1969): 境風土記、483-518
- 36) 宮崎俊弥(2007): 群馬県農業史 上、27-30
- 37) 群馬県内務部(1903): 群馬県蚕糸業沿革調査書、18-19
- 38) 鈴木芳行(2011): 蚕こみる明治維新 渋沢栄一と養蚕教師、5-15
- 39) 前掲書10)、3-5
- 40) 「せきちようす」と読み、桑を植えるのに適した土地という意味
- 41) 前掲書10)、7-11
- 42) 前掲書1)、9-10
- 43) 鈴木芳行(2011): 蚕こみる明治維新 渋沢栄一と養蚕教師、6-8
- 44) 前掲書10)、1-2
- 45) 五十嵐正夫(2017): 豊受村上蓮沼の明治蚕種屋人物語、56-57
- 46) 伊勢崎市(1983): 伊勢崎市史民族調査報告書第二集 八斗島町の民俗 一利根川流域の生活と伝承一、60-61
- 47) 群馬県(1971): 群馬百年史上巻、335-337より作成
- 48) 一般財団法人大日本蚕糸会 蚕業技術研究所(2010): 養蚕、35-38
- 49) 田島弥平(1879): 続養蚕新論一
- 50) 境町(1995): 境町史 第2巻 民族編、153-155
- 51) 群馬県蚕糸業協会(1954): 群馬県蚕糸業史上巻、385-393より作成
- 52) 群馬県企画部(1960~2015): 群馬県統計年鑑より作成
- 53) 伊勢崎市(1984)伊勢崎市史 自然編、104-108

(2019.9.28受付, 2020.3.30受理)